

これら二つの「厄年」のグループが、この祭の取りまとめる中心となり、祭当日の2日前の1月13日に社殿（大きな木造の祭壇）を作る為の五本の神聖なブナの木を選びます。社殿の建設後、近くの神社から神主が呼ばれ、この社殿に道祖神の魂を授ける特別な儀式が行われます。

祭は1月15日の夜に本格的に始まり、村の男性住人達が種火から火を付けた松明を手に、社殿への攻撃を開始します。42歳の「厄男」達は社殿の上に座り、歌ったり唱えたりしながら屋根を防御し、25歳の男達はその下で、松の小枝を振りかざして松明の火をはね返し、木造社殿を守ります。戦いの興奮が去り、参加者達全てが離れた場所に避難すると、灯籠（子孫の健康と幸運を願う地元住民の家族達によって丁寧に作られた、装飾した竿に付いた大きな灯籠）と共に、社殿は儀式的に燃やされます。

美しく装飾されたこの大竿の複製は、おぼろ月夜の館に展示されています。